

日比谷における宝塚文化の歴史的意義と展望 ～ 発掘された写真と映像から探る 1930年代のヒビヤ・モダン

平成25年度 共立女子大学千代田学事業 報告書

目次

- 報告1 山梨牧子 「フィルムの発見に導かれた学際的共同研究の実践」 …p.2
- 報告2 川崎賢子 「東京宝塚劇場の竣工とモダニズム文芸」 …p.4
- 報告3 近藤瑞男 「『源氏物語』における春日野八千代」 …p.5
- 報告4 鈴木国男 「オペラと宝塚歌劇」 …p.7
- 報告5 鈴木裕輔 「新聞が伝える『宝塚の東京進出』」 …p.8
- 報告6 ノルドストロム・ヨハン 「P.C.L.映画製作所に於ける宝塚と日比谷モダン」 …p.9
- 報告7 下湯直樹 「千代田区の文化資源を生かした連携事業」 …p.11

報告 1 【フィルムの発見に導かれた学際的共同研究の実践】

山梨牧子

2011年秋、神奈川県のある個人宅で宝塚関係を含む写真や16mmが発見された(写真1)。それらは、昭和10年前後に藤岡宏という一人の青年が撮影したもので、アルバムには宝塚歌劇『すみれ娘』の舞台写真ほか、日比谷界隈で宝塚の生徒さん達を映したものが丁寧に整理されていた(写真2a, b)。付随して発見されたフィルム缶には2本のリールに3作品『流線美』、『ラ・ロマンス』、『パリアッチ』が収められていた。このうち『流線美』は、1935年6月に上演された榎茂都陸平作・演出の同名のレビューをモチーフに創作されたホームムービーであり、後者2作品は東京宝塚劇場で撮影された1936年5月月組公演『パリアッチ(悲しき道化師)』と同年10月雪組公演『ラ・ロマンス』であった。

本助成を得て、映像処理と資料調査、関係者取材を行い、地域アーカイブとして公開し保存することを目的に、7人のメンバーそれぞれの専門領域の考察を深めながら学際的共同研究を進めた。フィルムについては、イマジカ・ウエストにデジタル復元を依頼し、映像作家の三行英登氏の協力を得て修正処理することで、鮮明な画像で見られるようになった(日比谷図書文化館催事プログラム2頁参照)。11月16日、日比谷図書文化館で行われたシンポジウムでは地域の歴史を顧みる機会として広く一般に公開し、1月14日の早稲田大学におけるシンポジウムでは研究者を主な対象に学術的成果を発表した。

また、文化資料的価値を考えると、藤岡氏が遺した写真とフィルムから「東京における宝塚」を改めて顧みる契機となり、都市文化の位相や近代性を考察する上でも多くの示唆を与えてくれた。今回のような個人の記録が、どのように研究や文化継承に活用され得るのか。将来のアーカイブ構築に寄与する方法を模索する試みである。

具体的には、藤岡氏のフィルムと写真が開場間もない東京宝塚劇場とその周辺で撮られていたことから、80年前の日比谷における宝塚を振り返る契機になったということでも今回の共同研究の意義がある。なぜ、関西の実業家で宝塚少女歌劇の創立者である小林一三は、この芸能の東京進出を企て、常打劇場を設けることで何を求めたのか。関西芸能である宝塚少女歌劇の日比谷進出について詳しくは日比谷図書文化館のプログラム(12-13頁)に譲るが、ここでは藤岡青年が闊歩していた日比谷のモダンライフを再考してみたい。

1934年の宝塚歌劇の日比谷進出を機に、演劇と映画を2本柱とした娯楽産業のメッ

かは、西洋式日比谷公園と帝国ホテルに隣接し、「洋風」文化消費の中心地を形成したといえる。そんな界隈で遊んでいた所謂モダンボーイのひとりであった藤岡氏の足跡を辿ってみると、関東大震災から10余年経って変わりゆく街の活気や気配が起想され、現在の町並みに重ねてみた（早稲田大学演劇映像学連携拠点からの助成でドキュメンタリーを制作）。

藤岡宏さんのご遺族に聞き取りを行ったところ、1934年に東京宝塚劇場が開場してから熱心な宝塚歌劇に足繁く通うようになり、新しく購入したばかりのカメラ¹で趣味の写真を撮っては現像したものをプレゼントしたりして楽しんでいたという。

当時はたいへん高価だった動画撮影用のカメラを趣味としながら、日比谷の劇場と映画館通いで演劇と映画三昧の日々を送っていたらしい。藤岡氏の手記には、「東京宝塚劇場が出来ると月3回くらいパスを買ってもらい、毎日映画館を2館見て音楽会に行く」、「その当時私にひまがなかった。映画を見 夕方東京宝塚劇場に行く」等と綴られている。さらに手記には、「宝塚は月に3-4回、前列の34番が指定で写つてはいけない写真を撮る…」とあるが、藤岡氏が器材を購入していた銀座7丁目の金城商會が発行していたニュースターには堂々と「舞台撮影虎の巻」を寄稿していた（写真3）。映画産業が飛躍的に隆盛した当時、写真・映像メディアは、舞台製作陣にも観客にも魅力的な媒体だったことが推察できる。宝塚も映画製作に乗り出していたし、舞台でもキノ・ドラマといって、銀幕を使った演出が試された。また、東京宝塚劇場の開場を機に昭和9年から『東寶』、昭和11年にはグラビア中心の『宝塚グラフ』や『エスエス（Stage & Screen）』が出版されている。このような写真入りの刊行物の普及は、東京の評判や流行を全国へ伝え、藤岡氏のような青年をも含むファンを飛躍的に増やしたといえる。

藤岡氏は特に葦原邦子のファンだったとのことで、撮影された舞台2作品で主役を務めている姿が生き活きと映っている。また、『パリアッチ』には広島で被爆して亡くなった園井恵子も鮮やかに映っており、彼女の生前の舞台姿を映す唯一のものかもしれないということで7月頃から新聞メディアでも注目された（プログラム11頁参照）。

最後に、本共同研究では、メンバー以外の多くの方々にもご協力頂いたことを付け加えておく。浅子順子氏²はご自身の記憶のご提供のみならず重要な関係者に繋いで下さった。『パリアッチ』にシルビオ役で出演されていた昇道子氏と、昇さんの従妹であり園井恵子のファンで両作品を観ている黒田弘子氏に聞き取りをすることができたこと

¹ 静止画はドイツのツァイスイコン社の35mmレンジファインダー型カメラの第一弾コンタックス1型を使用。動画にはイーストマン・コダック社の16ミリシネコダックモデルK(100フィート/撮影で4分10秒撮影可能) 情報協力：飯田定信(小型映画研究家)

² 宝塚歌劇団演出家であった故内海重典氏と歌劇団出身の故加古まちこ氏の長女

は、藤岡氏の被写体と当時の様子を知る貴重な手がかりとなった。さらに、葦原邦子のご遺族と岩手町にある「園井恵子を語り継ぐ会」の関係者に復元映像を見てもらい、意見交換をしたことで、本復元映像と研究成果は歴史的文化資料として役立ち得る展望も広がり、今後の活用と更なる考察の媒体となることが期待される。



写真 1



写真 2 a

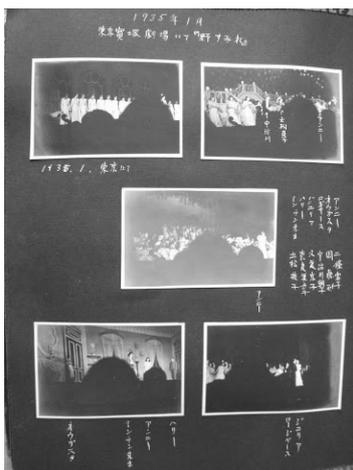


写真 2 b



写真 3



報告 2 【東京宝塚劇場の竣工とモダニズム文芸】

川崎賢子

今は静かなたたずまいの日比谷の街だが、歴史をひもとくとしばしば争乱の地となり、文化のみならず政治的な焦点となる空間だった。日露戦争後（1905年）の日比谷焼き打ち事件は近代の大衆暴動として特筆され、1945年から52年にかけて周辺の施設、劇場はGHQ占領軍に接収され、ここがアメリカの日本占領の中核だった。

さて80年前の日比谷といえば、日比谷公会堂では1933年パリ国立音楽院を首席で卒業した原智恵子の帰国後初のピアノ独奏会、1934年には藤原歌劇団旗揚げ公演が行なわれている。1933

年末から翌年にかけて有楽町日本劇場、日比谷映画劇場が開場した。東京宝塚劇場の開場はそんな時期、1934年1月1日のことである。

関東大震災からの復興によりやくめどが立ち、古い盛り場の浅草から、音楽、オペラ、映画の観衆観客が有楽町、日比谷へと移動する。

80年前、それは満洲建国と日本の国際連盟脱退、ナチスの政権掌握、ルーズベルト大統領誕生によるアメリカのニューディール政策開始、ソ連の国際連盟加入と、第二次世界大戦にむかう国際的な布置が動いた時期でもある。1933年4月29日には、日比谷公園で、国際連盟脱退詔書奉戴式が挙行され、2万の学生が集まったともいわれる。孤立する満洲国を承認したドイツ、イタリアへの返礼として宝塚歌劇はじめての海外公演が1938年に行われる。

東京日比谷に進出した宝塚歌劇は「エロ・グロ、ナンセンス」の時代を代表するジャンルとしてのいわゆる「レビュー」と一線を画すべく「清く、正しく、美しく」をことさら強調することになる。当時のモダン・ボーイ向けのメンズマガジン『新青年』誌は、ライバル関係にあった宝塚と松竹の少女歌劇をしばしば記事にした。それだけではなくこの時期、宝塚は少女小説ジャンルだけではなく、ミステリジャンルなど、男性読者の多い領域でもモチーフとして好んで扱われている。

たとえば久生十蘭「魔都」は『新青年』誌に1937年から連載され、1934年の歳末からおおよそ24時間の出来事を一年にわたって拡大して語るという、ジョイス「ユリシーズ」のダブリンを意識したような長篇である。そこでは今から80年前の日比谷が国際的陰謀渦巻く「魔都」東京の、都市機構・文化・メディアの集約される特別な場所として実に魅力的に描き出されている。東京会館、日比谷公園、帝国ホテル、日比谷警察をたどって最後は日比谷の交差点で銃撃戦という派手な作り。久生十蘭は創設期から文学座のメンバーとなる演劇人でもあるのだが、小説「魔都」は、なんと元宝塚生徒殺人事件を発端に展開する。日比谷は新しい物語を紡ぎ出す場所になったのである。

舞台のみならず劇場空間そのものにも歴史がありドラマがある。歴史の光と闇が交錯し、ひとびとの活力が沸騰する日比谷の地は世界につながるものと夢見られていたのだろう。

報告3 【東宝歌舞伎スターを唸らせた「源氏物語」における春日野八千代】

近藤瑞男

春日野八千代は、百年を迎える宝塚の歴史の中で特筆されるべきスターであるが、広く日本の演劇史の中でも注目すべき業績を残した。今回は、「源氏物語」上演史上の春日野の位置をたどりたい。

「源氏物語」の芸能化は、まず「葵上」「浮舟」「野宮」など能によってなされている。江戸時代に「あふひのうえ」「花山院后諍」「源氏六十帖」などの浄瑠璃があるが、基本的に浄瑠璃は「平家物語」以降を題材のするため、「源氏物語」はあまり題材にはならない。歌舞伎においても武家社会を背景にした作品が圧倒的で、「源氏物語」の劇化は行われなかった。したがって「源氏物語」の芸能化は、近代になってからの短い歴史を持つにすぎない。

明治、大正期には、榎本虎彦作「葵の上」（明治 40 年）上演があるがのみで、昭和 5 年、箏曲の舞踊劇「源氏物語葵之上」が上演され、次いで昭和 8 年番匠谷英一作「源氏物語」上演が企画される。これが警視庁により公演直前、不敬罪にあたるということで上演禁止を命じられ、日本演劇史上の大事件となる。坂東蓑助（八代目坂東三津五郎）主演で歌舞伎座上演予定、坪内逍遙なども参加した意欲的な作であった。昭和 6 年、満州事変が勃発しており、軍国化してゆく時代に「源氏物語」の上演は、押しつぶされたのである。つい近年に、こうした抑圧がおこなわれたことは、忘れてはならない。

やがて戦後、社会の安定とともに、文学、映画、演劇において「源氏物語」がとりあげられることとなる。昭和 26 年 5 月、谷崎潤一郎の「新訳源氏物語」が刊行され、大映創立 10 周年として、長谷川一夫の光源氏で映画「源氏物語」が製作された。そして歌舞伎座では、3 月に画期的な船橋聖一脚色の「源氏物語」が菊五郎劇団によって上演される。市川海老蔵（十一代目市川團十郎）を光源氏に配して大好評を受け、10 月には改訂増補の上演、同 27 年第 2 部、同 29 年第 3 部の上演が行われた。批判も多くあったが、圧倒的な美しさで批判を跳ね返し、歌舞伎界に「王朝物」という新しい分野を開くことになった。

こうしたいわば「源氏物語ブーム」の中で上演されたのが、昭和 27 年 1 月 1 日初日の宝塚大劇場、花組「源氏物語」であった。小野晴通脚色、白井鐵造演出。春日野八千代の光源氏、八千草薫の若紫、有馬稲子の葵の上、由美あづさの藤壺等である。翌 2 月、南悠子の光源氏で再演。以降平成 12 年「あさきゆめみし」まで 6 作品、合計 8 作品の「源氏物語」が宝塚で上演されている。

春日野八千代は、その内三回にわたって光源氏を演じ、宝塚のみならず演劇界の光源氏として名をたかめた。

私が宝塚で「源氏物語」を出すには、春日野八千代を考えた上のことです。このひとの源氏なら天下一品です。背景なしで黒幕の前に立っているだけでも立派です。（白井鐵造 上演筋書）

天下の二枚目スター長谷川一夫に「よっちゃんにはかなわない」といわしめたのが、春日野八千代の光源氏であった。

「歌劇はお好きですか？」友人に紹介されて、小池修一郎氏に会った時に最初にかけてられた言葉だった。イタリアから帰ったばかりの私は、歌劇と言われてとっさにオペラのことを連想してしまい、すぐに反応できなかった。そして小池氏の仕事を「宝塚」と認識していたことを思い知った。一般の言い方としては現在でも間違っていないだろう。しかしその時私は、これはまさに日本人が作った「歌劇」であるということに今更ながらに思い至り、以来、小池氏をはじめとしてそれに携わっている人々に敬意を表して「宝塚歌劇」という呼称をなるべく用いるようにしている。もちろん文脈によっては「宝塚」と言ったり「歌劇」と言ったりもする。そうして、それ以前から自分が親しんできたヨーロッパ演劇やイタリアオペラと宝塚歌劇が、一本の太い水脈でつながっていることを心嬉しく感じるようになったのである。

数あるイタリアオペラのレパートリーの中でも、とりわけ人気の高い演目のひとつである『パリアッチ』が80年近く前に東京宝塚劇場で上演され、その映像を見ることができるとは、文字通り夢のようなことである。本年1月14日に早稲田大学小野記念講堂で開催されたシンポジウム「映像にみる戦前戦後の宝塚歌劇」における、大阪大学の山田高誌氏の発表「宝塚“オペラ”の系譜と意義—『パリアッチ』を中心に—」は、このフィルムを示すものを見事に分析していた。その一部を引用しつつ考察を加えてみたい。

まず驚くべきことに、藤岡氏の撮影したわずか約4分の映像の中に、全体の名場面を遺漏なく見ることができる。この上演が原作にかなり忠実なものであることがわかるのである。その一方で、1920年代30年代における宝塚歌劇のオペラ翻案作品の数はそれほど多くはなく、かつ『パリアッチ（悲しき道化師）』は、約2年前に開場した東京宝塚劇場のみで上演され、その後は戦後までオペラものは見られないとのことであった。当時歌劇団内部に路線の違いのようなものがあり、東京では本格的オペラ上演を目指す動きがあったものの、結局はオリジナル作品に傾斜していったのではないかと、というのが山田氏の推論である。映像その他の資料から、十分にレベルの高いものであったと推測できる舞台ではあったが、これが限界点であると判断されたのであろうか。

ここで注目したいのは、その後16年の空白を経て1952年に登場したオペラものが、白井鐵造による『トゥランドット』であるということだ。白井は34年にも『トゥランドット姫』を舞台にかけている。欧米留学の途次、シカゴでプッチーニの作品を見て感激したことは自伝に記された通りであるが、34年の作はオペラの原作であるカルロ・ゴッツィの戯曲に近い。28年、白井の渡米直前に出版された高橋邦太郎による翻訳を

下敷きにしていることは確実である。また池田文庫に所蔵されている白井の創作ノートには、32年のパリのヴィュー・コロンビエ劇場における同作の上演について調査した記述がある。

さらに、52年の上演はその再演ではなく、骨格を借りながらも結末まで変えた白井のオリジナル作品とあってよいものになっている。宝塚歌劇100年の歩みは、今の言葉でいうメディアミックスの歴史ということもでき、それはまた西洋においても日本においても文芸の伝統そのものであるが、創立以来約20年の試行錯誤期において、ヨーロッパの演劇やオペラがどのようにして宝塚歌劇に取り入れられていったか、そして今日につながる独自の路線がどのように作られたか、さらには東京宝塚劇場の開場が一つの転換点になっているのではないかということ、これらを探る上で、『トゥーランドット』と『パリアッチ』というイタリアオペラの代表作が、重要な意味を持っていることは明らかである。そうした観点からも、藤岡氏によるこの映像は極めて貴重な資料なのである。

(宝塚歌劇における『トゥーランドット』上演に関しては、拙論『トゥーランドット変容』「共立女子大学文芸学部紀要第53集」2007年1月 を参照されたい。)

報告5 【新聞が伝える「宝塚の東京進出」】

鈴木裕輔

東京宝塚劇場が開場する前の宝塚少女歌劇は自前の公演会場を東京に所有していなかった。そのため、東京で公演を行う場合は、帝国劇場、市村座、邦楽座、歌舞伎座、新橋演舞場などを利用していた。従って、東京宝塚劇場の開場は宝塚少女歌劇団が東京に拠点を確保したことを意味していた。いわば関西から東京にやってきた宝塚少女歌劇は東京の演劇界や興行界にとって脅威であり、東京の舞台関係者の中で「宝塚少女歌劇団が東京での活動を本格化させるための第一歩」、「小林一三が東京の演劇界に殴り込みをしかけた」と受け止められた。

そこで、今回は、1934年の前後の新聞各紙が東京宝塚劇場の開設に関し、劇場と宝塚少女歌劇、さらには宝塚少女歌劇の創設者である小林一三をどのように取り上げているかを検討した。主な対象は、東京を本拠とする読売新聞と、大阪から東京に進出した東京日日新聞と東京朝日新聞であった。

東京宝塚劇場に関する最初の報道は、建設計画が公表された1932(昭和7)年5月14日の翌日には掲載され、「日比谷に千二百坪の土地を買入れ株式会社東京宝塚劇場を設立する事となつた」(読売新聞、1932年5月15日朝刊3面)、あるいは「本格的な

東京進出を企て」と報道された（東京日日新聞、1932年5月15日朝刊11面）。

また、東京宝塚劇場を「宝塚少女歌劇の東京本城」（読売新聞、1932年10月8日夕刊3面）ととらえ、「延四千五百坪で、イス席三千百人というのは東洋一」（東京朝日新聞、1933年1月5日朝刊7面）というように規模の大きさも報道されていた。さらに、後に東京宝塚劇場の社長を務める秦豊吉や作曲家の山田耕筰の入社など、人事についても比較的詳細に紹介されていた。

一方、1934（昭和9）年1月1日に実際に東京宝塚劇場が開場すると、読売新聞は東京の興行界の中心であった松竹の大谷竹次郎による手記の体裁をとった記事を掲載し、「私の親友であり又好敵手とも云える一三小林氏の東宝劇場誕生の挙が、東都の劇界に投ずる一石の波紋は如何なる結果を示すか、一寸予測は出来ない」、あるいは「素人小林一三と玄人大谷竹次郎の一騎打」というように、「東宝対松竹」という構図を打ち出した（読売新聞、1934年1月1日朝刊15面）。また、東京宝塚劇場による俳優の募集については、表面的には俳優の募集でありながら、「俳優募集はつまり引抜いた時に「応募した」という逃げ道を作っている」と、実質的には募集の形をとった松竹所属の俳優の引き抜きであると指摘する記事も掲載されている（東京朝日新聞、1934年1月9日朝刊11面）。なお、ここでは、小林一三が興行の素人、大谷竹次郎が玄人とされている点が注目される。

このような東京宝塚劇場の開場を巡る新聞報道を整理すると、次のような特徴が見出される。すなわち、開場前は人事や建設の状況など事実に関する報道が中心であり、開場後は「素人の小林一三の挑戦を玄人の大谷竹次郎がどう受けるか」という講談的な記事が増加していた。また、東京朝日新聞や東京日日新聞が東京宝塚劇場の動静を比較的詳細に報道したにもかかわらず、同様の記事は両紙の基となった大阪朝日新聞や大阪毎日新聞ではほとんど掲載されておらず、地域の違いが報道の内容に影響を与えていることが示唆された。ここから、東京宝塚劇場の開場は東京の演劇界にとっては脅威であり、大衆にとっては興味の対象だったが、関西の演劇界と大衆の関心が高くなかった可能性が推察された。

報告6【P.C.L.（ピー・シー・エル）映画製作所に於ける宝塚と日比谷モダン】

ノルドストロム・ヨハン

1930年代の前半。それは、日本のエンターテインメント界に於いて、大きな変革をとげた時期である。東宝宝塚ビルの建設、トーキー映画の出現、トーキー映画製作所P・C・

Lと宝塚の合併による現在の東宝の誕生。初期のトーキー映画スタジオ、P・C・Lと宝塚劇場の役者との関わりに焦点を当て、日比谷や丸の内のモダンの扱い方とともに具体的に考えてみたいと思う。

スタジオP・C・Lと宝塚劇場団体の関係は小林一三に始まる。P・C・Lが創立された時から小林は相談役として参加して、社内の資料によるとP.C.L.と小林一三の関係はP・C・Lにとって非常に重要な物であったことが分かる。P・C・Lはスタジオ運営について小林に何度も相談を持ちかけていた。

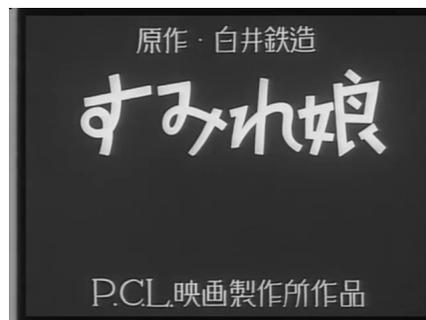
P・C・Lのイメージは、モダンで、都会的で、おそらく、西洋の消費社会の文化スタイルと音楽文化に結びつくものである。そして、P・C・Lは都会人を対象とし、欧米の大衆文化と完全に適合し得るモダンで新しいイメージを強く醸し出していた。P・C・Lの初期作品を見れば、ハリウッドミュージカルの人気から大きな影響を受けていたことがわかる。『ほろよい人生』（木村莊十二監督、1933年）、『さくら音頭 - 涙の母』（木村莊十二監督、1934年）、『踊り子日記』（矢倉茂雄監督、1934年）、『エノケンの青春酔潑伝』（山本嘉次郎、1934年）、『すみれ娘』（山本嘉次郎、1935年）などのような作品では、音楽との強い関係がみられ、オペレッタ映画やレビュー映画の領域でとらえられている。

スタジオP・C・Lは、東京の風景を彼らの映画にモダンな味を付けるために、たくさん取り入れた。例えばP・C・Lの二番目作『純情の都』（木村莊十二監督、1934年）の中で都市の中で遊園地などを映しながら、近代都市のはなやかで明るい面を紹介している。同時に、若い女性にとっては時に危険な一面を見せる都市の特徴もあらわしている。また、『エノケンの青春水潑伝』の作品中では、同年に完成された東京東宝劇場の姿をみることができ、舞台上で歌い踊る宝塚の生徒達の姿も垣間みることができる。また、レビューと音楽映画として宣伝された『すみれ娘』は岸田辰弥に続いて宝塚のレビューを大成功に導いた白井鐵造の原作による作品である（写真）。

P・C・Lとして発表した第4作目は『さくら音頭-涙の母』であり、P・C・Lとはじめて宝塚と共同製作した作品であったという点で特筆される。作品をPRする上でも、このコラボレーションを強く打ち出していた。次に作られた『浪子の一生』（矢倉茂雄監督、1934年）は興味深い例だ。なぜなら、東宝とP・C・Lのコラボレーションを示しているだけでなく、当時は宝塚が俳優をレビューの生徒としてだけではなく、映画への起用を視野に入れて雇っていたらしいことがわかるのだ。主な例としては伏見信子が上げられる。彼女は他の映画スタジオで活動していたが、1934年東京宝塚劇場専属の映画女優となった。同じく、澤蘭子や、いとうよのすけ等が挙げられる。もうひとり注目すべき女優に辰巳澄子がいる。彼女は1919年に宝塚音楽歌劇学校へ入学し、1935年8月の東京宝

塚劇場公演「モオン・ブルウメン」で退団。その後まもなく東京宝塚劇場専属の映画女優としてデビューを果たし、1938年のP・C・L作品『藤十郎の恋』に出演した。

このように、その後、日本を代表する映画・演劇の興行会社である「東宝」が形成されていく黎明期には、東京宝塚劇場とその子会社、関係者などに様々な接点があった。つまり、P・C・Lと東京宝塚劇場、小林一三や歌劇団生徒や専属の映画女優達のように。宝塚劇場専属の女優の中には、P・C・L映画で名声を得た者も珍しくはなかったし、歌劇団の生徒も在団中から映画に出演し、後年に東宝または他会社で顕著な活躍をみせた。そして当時のモダンな日比谷の街並がP・C・L映画を彩っていたのは言うまでもない。P・C・Lと宝塚がその後、それぞれが発展していく上で、互いに大きな作用をもたらしていたのである。



報告7 【千代田区の文化資源を生かした連携事業】

下湯直樹

千代田区日比谷公園周辺には1911年に竣工した帝国劇場をはじめとして日比谷公会堂（1929年）、日生劇場（1963年）など歴史ある劇場が数多く所在し、日比谷は劇場街として知られ、いずれも地域における貴重な文化資源となっている。そのなかでも1934年、日比谷の一角に日本第一級の大劇場として開場した東京宝塚劇場が今年で80年を迎えることとなった。東京宝塚劇場は日比谷における劇場街の発展、ひいては文化的な拠点形成の一翼を担った劇場であり、同じ日比谷にある公立の日比谷図書文化館としても連携する形を模索してきた。

昨年、共立女子大学鈴木国男教授を代表とする本プロジェクトが立ち上がり、当館も参画させていただいた。その過程のなかで藤岡宏氏という個人が遺した記録写真や映像を通して、研究者や歴史を紐解く関係者との交流が芽生え、その調査研究が結実し、一本のドキュメンタリーが完成した。その成果がついに

2013年11月16日にて当館の日比谷カレッジにて「日比谷における宝塚文化～映像と写真から探る1930年代のヒビヤ・モダン」という一般参加の場で披歴されることとなった。参加者からは「貴重なフィルムと証言を一般に公開して下さってありがとうございます」、「一青年の趣味の映像が、後の時代の宝となる！素晴らしいと思いました」といった声が多く寄せられ、延べ158人が参加した非常に盛況な会となった。本プロジェクト通して、宝塚歌劇の公演はともすれば舞台の華やかさのみに捉われがちなところを参加者自体がその伝統と歴史的の重みを感じるとともに改めて東京宝塚劇場が千代田区の貴重な地域資源であることが認識する機会となった。

今後、本プロジェクト成果でもあるドキュメンタリー映像や写真を千代田区内でどう活用していくか今後の課題とするが、まずは2014年4月23日より当館で東京宝塚劇場開場80周年記念特別展「日比谷に咲いたタカラヅカの華」を開催し、一部その研究成果を活用する予定である。そこで、東京宝塚劇場のこれまでの軌跡を展示品とともに理解していただくとともに、一人でも多くの方に当プロジェクトの成果を広めていきたい。加えて、同展覧会の開催にあわせて特別講演として千代田区ゆかりのある元タカラジェンヌを講師に招いたトークショーを開催する予定で、当時の千代田区や劇場街のようす、東京宝塚劇場の思い出などお話いただくなど、今後も東京宝塚劇場を中心に周辺情報を蓄積し、20年後に控える100周年に向けた記録として留めておきたい。最後に文化政策の必要性が増す昨今、地域の大学である共立女子大学、企業の東京宝塚劇場、公共の文化施設の日比谷図書文化館とが一つの周年に向けたプロジェクトを通して結びついた産学公連携の今回の事例が、地域連携の一つの形として今後の地域連携の参考となれば幸いである。

